西來寺報

平成二十二年春号

お彼岸とは

皆さんはお彼岸をどのように過ごされていますか。

お彼岸には、浄土真宗に限らず、全国のお寺やお墓に多くの方がお参りをされます。また、この時期にはお寺で法要を勤められる事もあります。こうしたお彼岸にかかわる仏事は、私たちの祖父母や父母から伝えられてきました。

彼岸ということばは、私たちの生きている迷いの世界を「此の岸」というのに対して、迷いや苦しみのない世界である阿弥陀の浄土、「彼の岸」を意味します。此岸に生きる私たちが生死に迷う世界から浄土のさとりの岸に至る事を願う仏事とされています。このお彼岸思想は、悩みや苦しみのない浄土に生まれたいと願わずにいられない、私たち人間の心から生まれてきたといえます。浄土真宗では、亡くなられた方を諸仏といただいています。亡き人を偲ぶことをとおして、亡き人が身をもってしめしてくださった、生老病死の身を生きているという事実に立ち返らされるのです。だからこそ私たちは亡き人を諸仏と仰ぐのです。親鸞聖人は、諸仏をとおして仏陀の教えを念仏、「南無阿弥陀仏」といただかれ、私たちに伝えてくださっています。

お彼岸にお寺やお墓にお参りすることは、ただ単に先祖供養をするだけの行事ではありません。浄土真宗において、本来お参りすることは墓石にも南無阿弥陀仏と刻まれているように（各、家によってことなりますが）、諸仏と仰ぐ亡き人からかけられた願いを、身をもって聞く場ではないでしょうか。彼岸法要も、仏陀の教え（お経）を聞き開き、永きにわたって子孫に伝えていくということでしょう。その聞法の場が寺院であり、家庭のお内仏（仏壇）なのです。

親鸞聖人の教えに生きる私たちは、お彼岸をお迎えするにあたり、私どもに先立って歩んでくださった人をとおして念仏の教えに耳を傾けたいものです。

さて、暑さ寒さも彼岸までといいますが、春の彼岸は三月の春分をはさんだ七日間。秋の彼岸は九月の秋分をはさんだ七日間。この時期に行われますが、この時期は昼と夜の長さが同じです。つまり太陽が真東からのぼり真西に沈んでいきます。西に沈んで行く太陽を見て、阿弥陀の浄土を観想するということが経典で述べられております。（観無量寿経の日想観）

およそ日本人ならたとえば、海や山に沈む、夕映えの光景を美しいと思わない人はいないでしょう。いろいろな映像でラストシーンに夕映えを持ってくるのは当然といえます。その夕映えの光に満ちた彼方こそ極楽浄土にふさわしいと昔の人は考えたのでしょう。以上のようなことからこの時期にお彼岸を迎える事になっています。

春彼岸法要案内

三月十八日（木）
（彼岸入り）
三月二十一日（日）
（彼岸中日　春分の日）

両日とも午後二時より

・御懇志の受付は、本堂で致します。

・法要ご出席の方は、なるべく過去帳または法名軸をご持参ください。

・ご都合やご事情により、法要に出席できない方には、申し経（過去帳等をあらかじめお預かりし、法要の際ご本尊に奉献）をお受けしますので、ご希望の方はお申し出ください。

紅梅とメジロ　一月十七日撮影

【門徒Q＆A】

Q　『法名』ってなに？　死んでからもらうものじゃないの？
『戒名』とは違うの？

A　『法名』（ほうみょう）とは、仏弟子としての名のりを表す名前のことです。

一方、『戒名』（かいみょう）とは、文字通り、五戒（殺さない・盗まない・淫らな心を起こさない・嘘をつかない・酒を飲まない）に代表される数多くの戒律を守ることを誓い、実践していく者に与えられる名前です。

戒律のすべてを厳しく守りながら日常生活を送るというのは、現実的には無理な話ですから、本来は俗世間とは無縁な修行生活を送る出家者に授けられる名前が『戒名』ということになります。

ですから、『戒名』は、もともと決して「死んだ人に与えられる名前」などではなく、仏門に入り、戒律を厳守する証としての名前だったはずです。

他宗の事情は、はっきりとは分かりませんが、おそらく「生きている間はあげられないが、死んでしまえば、もう戒律を破る恐れもないのだから」と死後、『戒名』をつけるようになったのではないかと推察されます。

こうしたことから、現代では『戒名』は「死んでからもらう、死後の名前」という感覚が一般的になってしまったのではないでしょうか。

しかし、真宗では、宗祖親鸞聖人は、戒律を厳守する自力の修行を勧められるのではなく、一つとしてその戒律を守り得ない在家止住の我が身であることに目覚め、煩悩具足のままに仏の本願を聞き開いていく他力の歩みを大切にされました。

ゆえに真宗門徒は、生前に、真宗本廟（東本願寺）等で、『帰敬式』（おかみそり）《次回Q＆Aで取り上げます》を受式し、仏教徒の根本精神である『仏・法・僧』の三宝に帰依する仏弟子の名のりである『法名』をいただくのです。

また、世間では「戒名は長いほどいい」などと言われているようですが、阿弥陀如来の前では、万人は平等ですから、真宗大谷派における『法名』は、私たち僧侶も含め、すべて「釋〇〇」と三文字になっています。（女性の場合は「釋尼〇〇」と「尼（に）」の字が入りますが、これはサンスクリット語の語尾変化を表すもので「あま」の意味ではありません。）

「釋」の一字をもって「釈迦・諸仏の弟子」である仏弟子のひとりとなったことを意味し、教主釈尊の教えを拠り所とし、自らの人生の指針としていくことの決意を表す大切な名前です。

次回Q＆A掲載予定の『帰敬式』についても併せてお読みいただき、一人でも多くの御同朋御同行が、本願念仏のみ教えに照らされ、真宗門徒の証である『法名』をお受けになっていただくことを願ってやみません。

親鸞聖人七百五十回忌
お待ち受け神奈川大会

月日：平成二十二年
　　十月三日

場所：パシフィコ横浜

講演：五木寛之　氏

※　会場収容人員の関係で各寺のチケット割り当て数に制限があります。
詳細は改めてご案内致しますが、ご希望の方はお早めにお申し込みください。

《同朋会のご案内》

当寺では、毎月二十八日（土・日に当たる月は変更になる場合があります。）午後一時半より、同朋会を開催しております。聞法を中心に、学習会・上映会など幅広い内容となっています。参加ご希望の方は、当寺までご連絡ください。

なお、今月は二十六日（金）に『念珠の歴史と制作』を予定しております。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

【お願い】

西来寺は、今年、創建千二百年を迎えるにあたり、現在、皆様にお配りする記念冊子を作成中です。

当寺に関する古い資料・写真などお持ちの方がいらっしゃいましたら、複写等させていただきたく、ぜひ、当寺までご一報くださいますよう、お願い申し上げます。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

春・秋のお彼岸、七月・八月のお盆の時期に、お内仏へお参りに伺わせていただいておりますが、すべての御門徒のお宅を回り切れていないのが実情で、ご迷惑をおかけし、申し訳なく思っております。

祥月命日も含め、お参りご希望の方は、ご遠慮なく、当寺までお申し出ください。